

《論文》

# 帝国日本の西洋哲学史受容と植民地朝鮮： 安倍能成の西洋哲学史講義を手がかりに

許 智 香\*

## The Reception of the History of Western Philosophy in Imperial Japan and Colonial Korea: Focusing on Yoshishige Abe's Lectures

JiHyang HEO

The purpose of this paper is to trace the history of the reception of Western philosophy in Meiji Japan, focusing on the Imperial University. In the nineteenth century, historical-philosophical studies critiquing Hegel's transcendental conception of history laid the foundation for how the history of Western philosophy was received and interpreted in Japan. This paper aims to empirically examine three points: first, which books on Western philosophy were studied and translated into Japanese from the 1880s to the 1900s; second, who taught the history of philosophy at the Imperial University during this period and what texts they used; and third, how individuals who studied philosophy at the Imperial University later participated in the study and teaching of philosophy in colonial Korea. Regarding the third point, this study examines the content of Western philosophy lectures that Yoshishige Abe (安倍能成) taught at Keijo Imperial University based on primary sources.

キーワード：西洋哲学史、帝国大学、植民地朝鮮、安倍能成、哲学・哲学史講座

Keywords: History of Western Philosophy, Imperial University, colonial Korea,  
Yoshishige Abe, Course on the Western Philosophy

---

\* 立命館大学衣笠総合研究機構助教

jihyang@fc.ritsumei.ac.jp

Received on 2024/12/3, accepted after peer reviews on 2025/4/22

## I. はじめに

本稿は、植民地朝鮮の京城帝国大学（以下、京城帝大と略す）で「哲学、哲学史」第一講座担任を務めた安倍能成（1883–1966）を対象に、植民地朝鮮における西洋哲学史講義の具体的様子とその背景を解明するものである。

その目的は、朝鮮半島で最初に設置された「哲学科」（京城帝国大学法文学部、1926年5月授業開始）において、どのような内容の西洋哲学史が教えられていたのかを、明治日本の西洋哲学史受容史の中から明らかにすることにある。

まず、本稿が対象とする安倍の履歴を簡単に整理しておく。戦前における彼は、漱石門下生として、また岩波茂雄の親友として「大正デモクラシー」の時代を生き、岩波書店の哲学叢書、講座哲学の執筆者として活躍した。その後「高等遊民」の時期を経て1924年、京城帝大予科創設とともに「哲学、哲学史」担任教授となり、1940年9月より「内地」に戻って敗戦時まで第一高等学校の校長として、戦場に向かう若者たちに「はなむけの言葉」を送った（『向陵時報』, 1943=2004）。敗戦後には、雑誌『世界』の創刊に寄与し、幣原内閣では文部大臣を務めた（1946年1月～5月）。その後、学習院大学学長となり（1949年4月）、1966年に他界する直前まで同校の行事に参加していた<sup>1</sup>。こうした履歴をとらえて、鶴見俊輔らより「オールドリベラリスト」<sup>2</sup>の一人として批判されたことも有名な話である。

こうした安倍について高田里恵子は、次のように指摘している。

明治日本の安定期に青春時代を過ごし、いわゆる大正デモクラシー時代に人生の最盛期を迎え、日に日に言論の自由が奪われていった1930年代後半には、すでに中年から老いの下り坂にさしかかっていた。ところが、敗戦後、古き良き日本（そんなものがあつたとしてだが）を知る老人として復活し、はからずも「崩れゆく敗戦日本の道義」を体現してしまう。（高田, 2022: 69頁）

安倍の学問的業績の無価値性はすでに戦前から言われていた。むしろ、現在でも、あるいは現在だからこそ言及され、研究の対象になる安倍能成の文章が立派に存在することを誰も予言しなかった〔……〕それは安倍の京城時代の文章である。（同: 71頁）

高田が「京城帝国大学における安倍能成を批判的に扱うのは比較的書きやすいテーマ」と指摘した通り（高田, 2022: 72頁）、これまでの研究では、安倍が京城時期に朝鮮について書いたエッセイが主に取り上げられてきた<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 愛媛県生涯学習センター所蔵資料（0210934）に、1966年1月19日、第122回三木会終了後に撮った写真があり、その裏面に「次の123回（2月16日）が最後の御出席になった」と、撮影者・戒田淳が残したと推測されるメモがある。三木会とは、安倍能成が旧制一高の卒業後に参加していた「一木会」を参考に創設し、1954年から毎月第三木曜日に行われた会であり、安倍が1966年に他界するまで続いた（二宮, 2023）。

<sup>2</sup> 久野収・鶴見俊輔・藤田省三（1958）、小熊（2002）第5章を参照。

<sup>3</sup> 中見真理（2006）、崔在喆（2006）、神谷美穂（2007）（韓国語）、中根隆行（2008）、朴光賢（2008）。他に、戦後平和問題座談会における安倍の朝鮮半島認識を批判的に考察したものに南基正（2010）、車承棋（2011）、金杭（2011）があり、最近の研究に、安倍の教育論、教養論を分析した松井健人（2023; 2021）がある。

それに対し、本稿では、植民地朝鮮における西洋哲学受容史を明らかにする目的で、筆者が調査してきた安倍の講義ノートと日記を素材に、植民地朝鮮でいかなる西洋哲学史講義が行われていたか再現を試みる。そして、安倍の講義の背景として、彼が「内地」の東京帝国大学で学んだ西洋哲学史の内容を整理する。

一方で、安倍に関する先行研究のうち彼が書き残した日記を駆使したものに、青木一平の研究がある。彼は1932年より1937年までの安倍日記を手がかりに、京城の「ヘーゲル会」が計129回開催されていたことを明らかにしている（青木, 2022: 52頁）。だが、青木が安倍日記を通じて結論づける、「家族的な」交際、「対話」に基づく「共同体」というような「評価」には注意を払いたい<sup>4</sup>。

以下ではまず、安倍が行った西洋哲学史講義の一端を窺ってみる。そして、その前提として、明治日本における西洋哲学史の受容史を整理し、安倍が学んだ教師ケーベルを中心に帝国大学ではどのような哲学史の授業が行われていたかを明らかにする。

## Ⅱ. 京城帝国大学における西洋哲学史講義の一端

まず、京城帝大「哲学、哲学史」講座の担任教授3名について確認しておく。次章とも関連して東京帝国大学の在学時期を記した。

表1 京城帝大「哲学、哲学史」講座担任教授

名前	「哲学、哲学史」講座担任時期	東京帝国大学在学時期
安倍能成	1926.4.–1940.9.（第一講座／後任：田辺）	1906.9.–1909.7.
宮本和吉	1927.6.–1944.11.（第二講座）	1906.9.–1909.7.
田辺重三	（1927.7. 講師）（1927.9. 助教授～）1940.10.–1945.	1916.9.–1919.7.

1924年5月時点で京城帝大の赴任が決まった安倍は、同校予科教授の身分でヨーロッパを巡った後<sup>5</sup>、本科が開講した1926年5月から「哲学、哲学史」講座を担当することになる。1926年3月31日当初1つしかなかった同講座は、1927年6月1日の改定により2つに増設された。この第二講座に安倍が自分の妹・節子の夫である宮本を積極的に推薦し、また時期を同じくして田辺が講師に赴

<sup>4</sup> 青木は、安倍が開校記念式において述べた「希望と理想」を文面通りに解釈し、京城帝大の「学問共同体は、研究に基づく多様な「対話」によって構成される「対話」の共同体であったという（青木, 2022: 53）。しかし、そこで言及されるのは、「日本人」教授と「日本人」学生の戦後の回想に限られる。京城帝大哲学科が残した資料を見ると、京城帝大の朝鮮人学生たちも戦時期まで「哲学談話会」や文学会の「哲学部会」の研究発表会を通じて研究活動を行っていた（京城帝国大学法文学部, 1943a; 1943b; 1944）。朝鮮人学生を含む京城帝大法文学部においてどれほど「家族的な」交際が行われ、「対話」に基づく「共同体」が形成されていたのかについては、慎重な検討が必要であろう。また、青木は安倍による朝鮮人学生の就職斡旋にもふれている（青木, 2022: 52）。確かに日記にはそのような記述が多く登場するが、その意味は安倍が戦時期に放った次のような言説と合わせて検討されねばなるまい。「教育ノ実施スルモ大ニテ高等ナル教育ヲ施ス必要モナシ〔……〕朝鮮ニ於テハ大学ヲモ設ケタルモ大学ヲ卒業セン者ニハソレ丈ノ社会的地位ヲ与ヘザルベカラザルガ故ニ現在困難ナ問題ヲ生ゼリ」（「思想懇談会関係綴」, 1942: 1472頁）。

<sup>5</sup> 1924年9月1日に出発し、10月にパリに到着。この時、三木清と1か月間同じ下宿に滞在した。12月にはイタリアを旅行し、ローマで41歳の誕生日を迎える。その後ギリシャを巡り、1925年3月に再びパリへ戻る。5月にはドイツのハイデルベルクでリッケルトやヤスパーズの講義を3か月間聴講する。8月から10月にかけて北欧を回った後、11月に再びドイツへ戻り、11月末にオイケンと面会する。1925年12月に帰国の船に乗り1926年1月には日本に帰着している。同年3月には予科の卒業式に出席した（安倍, 1966）。

任したことで、上記のような体制が確立されたことはすでに知られている（安倍, 1966: 549）。宮本が哲学概論を、自分は主に西洋哲学史を担当したと安倍は回想している（安倍, 1966: 557）。京城帝大の「哲学、哲学史」講座の講義内容については<sup>6</sup>、哲学会雑誌の「彙報」をもとに題目まで明らかにした拙論（許, 2024）が先行研究として存在する。本章では、拙論で明らかにした「概論および概説」講義内容を抜粋しながら、さらに、安倍の講義ノートと日記を素材に、京城帝大の西洋哲学史講義を具体的に再現する。その前にまず、安倍が自ら出版した西洋哲学史書籍をおさえておく。

安倍はすでに京城に赴任する以前、西洋哲学史に関する概説書を出版していた。夏目漱石の『こころ』を自費出版し、古本屋から出版業へと転じて基礎を固めた岩波が、その次に乗り出したのが哲学叢書の発刊事業であった。この事業は約2年をかけ、東京帝国大学哲学科の岩波<sup>7</sup>の先輩と同期生が執筆者となり、計12巻が発刊された。安倍の『西洋古代中世哲学史』（初版1916年6月）と『西洋近世哲学史』（初版1917年4月）もその一部であった（安倍, 2012: 124）。この2つの西洋哲学史が参考にした書物は以下である。

まず『西洋古代中世哲学史』は、現代文化叢書（Die Kultur der Gegenwart）の『一般哲学史（Allgemeine Geschichte der Philosophie）』（Paul Deussen, 1919）<sup>8</sup>のうち、ハンス・アルニム（Hans von Arnim）による西洋古代哲学（B. DIE EUROPÄISCHE PHILOSOPHIE > I. DIE EUROPÄISCHE PHILOSOPHIE DES ALTERTUMS）と、2章の中世哲学（Clemens Baeumker, II. DIE EUROPÄISCHE PHILOSOPHIE DES MITTELALTERS）を基礎に、シリ（Frank Sewall Thilly）の哲学史、ツェラー（Eduard Gottlob Zeller）の『希臘哲学史綱要』、オイケン（Rudolf Christoph Eucken）の『大思想家の人生観』、大西祝の哲学史、波多野精一の哲学史とケーベルの講義を参考にしたと序文で述べている（安倍, 1916: 1）。

次に『西洋近世哲学史』は、上記の『一般哲学史』のうちヴィンデルバントの近世哲学史（B. DIE EUROPÄISCHE PHILOSOPHIE > III. DIE NEUERE PHILOSOPHIE）を翻訳したものである。「極めて小部分を附加し、又原書になき哲学者の年代を入れた外には、殆ど全体に於て原書に従った。〔……〕然し彼のカント哲学の論述は、カント哲学の内容を示すよりも、主としてカント哲学の意義を明らかにせんとする一個の論文と見るべきものであつて、本叢書の性質に副はないし、且つカントの哲学について未だ知らない人にとつては、多くの意味を有しないと思はれる故に、余は彼の別著『近世哲学史』によつて殆ど全体を書き替へた」（安倍, 1937: 1頁）と述べている点から、近世哲学史は修正を施したカントに関する部分を含め、ヴィンデルバントに依拠したことがわかる。

一方、拙論の「哲学、哲学史」講座開設題目（許, 2024: 105-109頁）に注目してみると、「哲学、哲学史」講座の安倍・宮本体制が始まった1927年度分の題目は不明である。そこで以下では、年度が記載されている安倍の講義ノート<sup>9</sup>を参考に、この講座開設題目（許, 2024: 105-109頁）と講義ノートを合わせて安倍が京城帝大で行った西洋哲学史講義について整理してみる。

<sup>6</sup> 1926年度から毎年刊行された『京城帝国大学一覧』（1943年度分まで現存）の「京城帝国大学法文学部規定」「授業」項目には、学科ごとに「科目ノ細別及単位」が記されているが、例えば「哲学概論」「西洋哲学史概説」などのような程度しか知ることができない。

<sup>7</sup> 岩波茂雄は1908年9月に「プラトンの倫理説」を卒業論文テーマとして東京帝国大学哲学科を卒業した。

<sup>8</sup> 井上哲次郎もその一部をなす東洋哲学の日本哲学パートを担当した。A. DIE ORIENTALISCHE PHILOSOPHIE > IV. DIE JAPANISCHE PHILOSOPHIE（Deussen, 1919: 100-114）。

<sup>9</sup> 安倍能成資料、資料番号 0210809-0210833。

表2 安倍能成の西洋哲学史講義

年度	「哲学、哲学史」 講座開設題目より抜粋 <sup>10</sup>	講義ノートの内容
1927	不明	ノート①表紙「西洋哲学史概説一／昭和二年四月起稿」 ；「西洋哲学史概説／総叙」に哲学史の時代区分 <sup>11</sup> ；「古代哲学史／緒論」～「小ソクラテス学派」 これは安倍能成（1916）の章立てと同様 <sup>12</sup> 。 ノート②表紙に「西洋哲学史概説／昭和二年六月／二」 ；「第二節 Platon」～「アレキサンドリアの Philon」 安倍能成（1916）の4章3節と同内容で終わっている。
1928	西洋哲学史概説	ノート①表紙「西洋近世哲学史／一／昭和三年四月」 ；「第三篇 近世哲学 第一章 Renaissance の哲学」～「三 Spinoza」 ノート②表紙「西洋近世哲学史／二／Leibniz より／昭和三年六月」 ；「四 Leibniz」～「第三節 啓蒙哲学の結末」 ノート③表紙「西洋近世哲学史（三）／カントより／昭和三年九月」 <sup>13</sup> ；「第四章 カント及び独逸理想主義の哲学」～「五 ヘーゲル」
1929	西洋哲学史概説	ノートの存否不明
1930	西洋哲学史概説	ノート①表紙「西洋哲学史概説／I Zenon まで／昭和五年四月稿／稲葉氏講義」 ；「古代哲学史／緒論」～「Zenon」は「認識論問題」で終わり、次の頁から頁番号を「1」 にして「六月六日第一回 稲葉岩吉 <sup>14</sup> 氏」とある <sup>15</sup>
1931	西洋哲学史概説 （近世哲学史、 カントまで）	* ノート①表紙「Deutscher Idealismus／II／Fichte の歴史哲学より／昭和六年十一月」 * ノート②表紙「Kritik der Urteilskraft／Phaenomenologie des Geistes／Heidegger Kant und des problem Metaphysik／昭和六年四月／昭和七年四月／昭和十年四月」
1932	西洋哲学史概説 （十九世紀以後）	ノート①表紙「近世哲学史（四）／Hegel 自然哲学より／昭和七年九月」 ；「Hegel の続き／自然哲学」～精神現象学に関する内容 * ノート②表紙に「倫理思想史／一／昭和七年四月」とある * ノート③表紙に「倫理思想史／二／Locke より」とある（※ノート③の年度は推定）。 * ノート④表紙「倫理思想史／三／Schopenhauer より／昭和七年十二月卅一日」 * ノート⑤表紙「Deutscher Idealismus／III／Schelling の Idealitätphilosophie／昭和 七年十一月
1933	西洋哲学史概説 （古代～現代）	ノート①表紙「西洋哲学史概説（C）／一／昭和八年四月」 ；「西洋哲学史概説／総叙」～「第二節 〔アリストテレス以後の〕懷疑派と折衷派」 ノート②表紙「西洋哲学史概説（C）／二／昭和八年九月」 ；「第三節 新ピタゴラス学派」～「第二篇 中世哲学／第一章教父哲学」
1934	西洋哲学史概説 （近世）	ノート存否不明
1935	西洋哲学史概説 （古代、中世）	ノート①表紙「Hegel ノ哲学 その一／昭和十年度／昭和十一年度」
1936	西洋哲学史概説 （近世）	ノート①表紙「Hegel ノ哲学 その二／昭和十一年度／十月十九日より」 ただし、表紙のタイトルは傍線で削除されている。内容はヘーゲル哲学に関するもの。

<sup>10</sup> 本稿では西洋哲学史講義と関係のある「概論および概説」講義を抜粋する。あわせて「演習」および「特殊講義」の開設題目まで含めた京城帝大の「哲学、哲学史」講座開設題目については許智香（2024: 105-109 頁）を参照。

<sup>11</sup> 古代（希臘哲学／希臘羅馬哲学）、中世（Augustinus-Cusanus 基督教、教父哲学と新プラトン哲学／5ct-15ct）、近世（復興期の哲学 15ct-17ct／啓蒙哲学 Lock-Lessing の死 1689-1781／獨逸哲学 Kant-Hegel und Herbart 1781-1830／19 世紀以後の哲学）

<sup>12</sup> 「古代」部：1 章・創始時代、2 章・組成時代、3 章・倫理時代、4 章・宗教時代。

<sup>13</sup> 近世哲学史も安倍の『西洋近世哲学史』と章立てと内容が酷似している。

<sup>14</sup> 稲葉岩吉：1876 年 12 月新潟県生。日露戦争の際に陸軍通訳として従軍した。1915 年 8 月に参謀本部嘱託、1916 年より山口東京商業学校講師、同年 5 月から陸軍大学校東洋史講師を嘱託される。1925 年 6 月より総督府修史官に就任、朝鮮史編集会幹事を兼ねた（朝鮮人事興信録編集部, 1935: 44）。

<sup>15</sup> 「第二回 〔日付不明〕 清朝の創業」「第三回 六月十日」「第四回 六月十三日」「第五回 六月十五日」

1937	西洋哲学史概説 (古代、中世)	ノート存否不明
1938	西洋哲学史概説	ノート存否不明
1939	[田辺が古代中世 哲学史を担当]	ノート存否不明
1940	西洋哲学史概説 (近世)	ノート存否不明

雑誌の「彙報」などを参考に再現した講座開設題目と講義ノートを合わせてみると、おおむね次のことが指摘できよう。まず、彼が刊行した2つの哲学史が、古代および中世と近世部に分かれていたように、講義もまた、この2つがおおむね隔年ごとに繰り返されていた点である。そして、ノートの全体枠をみる限り、西洋哲学史に関するノートは、1930年度までが最も詳細に作成されており、それ以後のノートは特殊講義や演習講義の準備に用いたと推測される点である。1932年と記載のあるノートが「倫理思想史」に集中しているのは、安倍が1933年1月に脱稿した「問題史的哲学史」シリーズ、『道德思想史』（岩波書店）と関連する。

以上の安倍の西洋哲学史講義が京城帝大の学修科目の規定においてどのような位置づけにあったのかについて、簡単に触れておく必要があるだろう。

京城帝大は「内地」の東北帝国大学の事例を踏襲し、医学部と法文学部の両学部体制下で形を備えた。1931年度に限定していえば、哲学科は文系3学科（哲学科、史学科、文学科）の1つで、7種の専攻に分かれていた。講座類と専攻類が必ず一致するわけではなかったが（社会学講座はあっても専攻はなかった<sup>16</sup>）、「哲学、哲学史専攻」は講座名と同様、個別専攻として置かれていた。そこで、「西洋哲学史概説」は「哲学、哲学史」専攻者の学修科目で、2単位を取るようになっていた。なお、1935年の法文学部規定改正の以前までは、法学科も含めて他専攻者も自分の専攻外の科目を2単位（法学科はそれ以上）取る必要があった。専攻別学修科目はおおむね「概論」および「概説」、「特殊講義」、「演習」科目に分かれており（この形は解放後も引き継がれ、21世紀初頭まで続いた<sup>17</sup>）、安倍も「西洋哲学史概説」以外に演習と特殊科目を受け持った。上記した安倍の講義ノートでいえば、1931年度と1932年度で「＊」を付したノートは、特殊講義と演習で用いたものと考えられ、実際、1931年度の安倍の演習科目の題名は、「Kant, Kritik der Urteilkraft (Kritik der teleologischen Urteilkraft) [カント、判断力批判（目的論的判断力批判）]」、同年の特殊講義は「独逸観念論の哲学」で、1932年度の演習科目は「Hegel, Phänomenologie des Geistes（ヘーゲル、精神現象学）」、特殊講義は「独逸観念論の哲学（前年度の続キ）」と記録が残されている（許, 2024: 106）。なお、京城帝大の学期は3学期制で、4月1日から10日までの春期休業、7月11日から9月10日までの夏期休業、12月25日から1月7日までの冬期休業を挟んで3学期間授業が行われていた。

以上のことを踏まえて、雑誌の「彙報」に開設題目の記載がない、哲学史授業を始めた1927年度と、講義ノートの存否が不明である1929年度を中心に、日記にみられる哲学史講義に関する内

<sup>16</sup> 1943年3月17日「法文学部規定改正」によって文学科、史学科、哲学科が文学科に統合した際に、社会学専攻が独立（『京城帝国大学学報』194号、1943年3月）。

<sup>17</sup> 京城帝国大学の後身である国立ソウル大学校を例にみると、朝鮮戦争休戦の2年後である1955年度の「ソウル大学校文理科大学」「哲学科」の「教科目表」は専攻別に「講義」「概説」「演習」「特殊講義」となっていた（『檀紀四二八八年서울大學校一覽』1955年、88-89を参照）。

容を摘記しながら、安倍の西洋哲学史講義の一断面を窺ってみる<sup>18</sup>。

まず、1927年の日記から摘記してみよう。

- 2.2. 水 午前中講義。 午後 Überwegs の哲学史について Plutarchos の処をよむ
- 2.6. 日 午前中 Willensfreiheit につき Windelband の見
- 2.18. 金 夜 Rickert の歴史哲学を田辺君の訳でよむ
- 2.21. 月 講義の準備の為に Windelband の哲学概論、板垣君の新カント派の歴史哲学などよむ
- 2.28. 月 Windelband の頁〔Präudien〕を篠田君の訳でよむ。
- 4.26. 火 Burnet の Greek philosophy の Herakleitos の処を見る
- 9.25. 日 午前中 Windelband の platon をよむ
- 9.27. 火 Cassier の Platon をよむ
- 10.2. 日 午前中 Lask の Platon 論をよむ

以上で登場する学者名、ウーベルヴェーク（F. Ueberweg）、ヴィンデルバント（Windelband）、バーネット（Burnet）は、1927年度の日記に限定すれば、他にも繰り返し登場する。とくにヴィンデルバントを多く参考にしたようである。例えば、10月31日の日記に「夜 哲学史準備。Aristoteles の処、殆ど Windelband の古代哲学史による」とあり、哲学史講義に、*Geschichte der alten Philosophie*（1900）を参照したことがわかる。また、6月、7月の日記には「哲学史の講義はやめて Präudien を片付けることとし、今日四時間やりくたびれた」、「帰つて Präudien の下読み」、「今日は Windelband の Präudien 中 講習の参考となる様な論文をよむ」など、ヴィンデルバントの『プレルーディン（序曲）』に言及するくだりが多く、これは演習講義で原書を読んだ可能性を窺わせる。エミル・ラスク（Emil Lask, 1875–1915）もヴィンデルバントの弟子で、ヴィンデルバントやリッケルト、ジンメル（Georg Simmel, 1858–1918）と共にバーデン学派を代表する哲学史家であった。また、バーネットのギリシャ哲学史も明治期から参照されたものであり、次章で取り上げる波多野精一の『西洋哲学史要』（1901年）がバーネットを参照した一例である。安倍が「東大の講義の中で、これこそ大学の講義といふものだらうと思つたのは、波多野精一博士の『原始基督教史』であつた」（安倍、1966: 412頁）と回想している通り、波多野は、安倍の哲学史観に多大な影響を与えたと考えられる。

一方、1929年度の日記には具体的な学者名の登場は減っているものの、「哲学史の下読」「哲学史準備」「哲学史の講義をこしらへ」といった記述が散見される。これらは、1929年度に開設された「西洋哲学史概説」に向けた準備過程を示すものである。より具体的には、例えば、「シェリングの自然哲学の処を見る」（1.15.）、「ウインデルバンドを一時間半あまりよみ」（2.5.）、「アスターの哲学史 ヘルバルト<sup>19</sup>等の処をよむ」（2.8.）とあることから、前年度の第3学期の授業として近世哲学史の講義を準備したものとみられる。また、1929年度の2学期にあたる10月の日記に「フォレンダーの哲学史訳を見る」とある。フォレンダー（1860–1928）については、彼の講義ノートに、「K. Vorländer, *Geschichte der Philosophie*, 1903, 2 Bde.」と、「F. Vorländer, *Geschichte der*

<sup>18</sup> 安倍日記の翻刻は、（科研・基盤研究C）永島広紀、通堂あゆみ、新里瑠璃子、許智香の共同作業による。出版を控えているため、引用は最小限にとどめる。適宜摘記し中略記号は省略した。

<sup>19</sup> Johann Friedrich Herbart（1776–1841）

*philosophischen Moral, Rechts-〔ママ〕 und Staatslehre der Engländer und Franzosen*」<sup>20</sup>の記載があり、どちらを指すかが問題となるが、「哲学史訳」とあることから、安倍が参照したのは1929年に岩波書店から第1巻が出た『西洋哲学史』（K. フォールレンデル著、栗田賢三・吉野源三郎・古在由重共訳）であると推測される<sup>21</sup>。

それでは、安倍自身が学んだ哲学史とは、どのようなものだったのか。そこで、次章では明治初期に遡り、安倍の西洋哲学史講義の背景について探ってみる。

### Ⅲ. 1880年代から1900年代まで日本語に編訳・翻訳された西洋哲学史

三枝博音は『西欧化日本の研究』（1958年）において、「日本における哲学の移植」に「西洋哲学史」をこう位置付ける。

哲学を学ぶ学生または初歩者のための哲学史と哲学概論とが（たとえ著述にせよ翻訳にせよ）日本人の手で書かれることが必要だった。西欧においては哲学史は十九世紀の前半から、哲学概論はその後半から、もう一種の型ができはじめていた以上、日本における哲学移植もこの二つの線に沿ってすすまねばならなかった。二つのうちでは、哲学を外国から受容して間もない日本の学者たちは、哲学史にまず着手したことは自然だった。（三枝, 1973: 121 頁）。

本章では、安倍が参照した西洋哲学史の前史として、明治日本における西洋哲学史受容をめぐる様相につき概括的に触れてみよう。船山信一（1999）、柴田隆行（1997）などを参考に、初期の書物が出版された1880年代から安倍が東京帝国大学に入学した1900年代まで、日本語で（編訳も含めて）翻訳され、または執筆された西洋哲学史の書物をまとめたのが表3である。

表3 1880年代から1900年代までの西洋哲学史

書名	・「」は原文のままを移し、緒言の中の参照書物および人名を〔 〕に補足 ・参照および参考；引用者による補足で参照は参照書物の再現、その他は参考
末松謙澄『希臘古代理学一斑』（1883）	「本講引用書目」：ルイス〔Lewes〕氏理学史／シュエグラル〔Schwegler〕氏理学史並スタルリング氏補註／ウエベルウエグ〔F. Ueberweg〕氏理学史／メヨール氏理学史／バツテル僧正理学講義（ママ）／リッタル氏理学史／モーリス氏天理人道史／プレートー筆記ソクラチース辨冤
井上哲次郎・有賀長雄『西洋哲学講義』（1883-85、阪上半七）	「緒言」：シュウエグレール〔Schwegler〕、リュウイス〔Lewes〕、ユーベルウエグ〔Ueberwegs〕諸氏の哲学史に拠って西洋哲学の概略を講述し、東洋哲学を興さんことを企画すれども...
有賀長雄『近世哲学』（1884-85・全3、弘道書院）	「表紙」：哲学教授ぼうえん原著／哲学専修有賀長雄訳解／訳解近世哲学一卷／有賀氏蔵板／弘道書院発兌 参照：「ぼうえん」= F. Bowen, <i>Modern Philosophy from Descartes to Schopenhauer and Hartman</i> (1857) (1877)

<sup>20</sup> 表紙に「昭和三年四月」とある。愛媛生涯学習センター（0210812）。

<sup>21</sup> 本書は、1930年9月に2巻が、1931年5月に3巻が出されている。

竹越与三郎『独逸哲学英華』 (1884、報告堂)	「表紙」：独逸片利知蒙利須查利冒斯原著／日本・竹越与三郎講述／由井正之進筆記／独逸哲学英華・完／東京・報告堂 「凡例」：此書は余が曩きに独逸国キール〔Kiel〕大学校哲学博士チャーリボース〔Heinrich Moritz Chalybäus, 1796–1862〕氏著想考哲学相伝史〔 <i>Historische Entwicklung der speculativen Philosophie von Kant bis Hegel</i> , 1837 →英訳：1854〕ヘッジ氏著日耳曼〔ゲルマン〕芸文誌テンネマンネ〔Wilhelm Gottlieb Tennemann, 1761–1819〕著哲学史綱要〔 <i>Grundriss der Geschichte der Philosophie für den akademischen Unterricht</i> , 1812 →英訳：1832〕レウイス〔Lewes〕氏著哲学紀伝史の四書に即して独逸哲学を講述せしものを筆記せしものなり…力を四氏に得て巻端唯りチャーリボース氏の名を著するは其述専ら此人に頼り三子は参考に供するに過ぎされはなり〔原文はカタカナ〕
竹越与三郎『近代哲学宗統史』 (1884、丸善)	参照：V. Cousin, <i>Cours de L'histoire de la philosophie moderne</i> (1841-46) の概要を書いた英訳ウエート〔?〕, 1869.
中江兆民『理学沿革史』 (1885-86、文部省)	参照：Alfred Fouillée, <i>L'histoire de la philosophie</i> , 1875.
菅了法『哲学論綱』 (1887、集成社)	参照；リッター〔?〕, Schwegler, F. Bowen
三宅雄二郎『哲学涓滴』 (1889、文海堂)	「凡例」多くは材料をシコ〔?〕ウエグレル〔Albert Schwegler〕、クノーフィセル〔Kuno Fischer〕二氏の著書に取れり
清沢満之「西洋哲学史講義」 (1889-94)	参考：京都高倉真宗大谷派、真宗大学寮で行った講演で、筆記は上杉文秀、岡本覚亮による。真宗大学寮における哲学史講義は清沢が最初であり、1889年から94年まで行われた（1889年10月赴任）
『平民叢書第9巻・哲学変遷史』 (1894、民友社)	「例言」：本書はクノー、フィツシヤー〔Ernst Kuno Berthold Fischer, 1824–1907〕、シエウエグレル〔Schwegler〕、及びエルドマン〔Johann Eduard Erdmann, 1805–1892〕等の哲学史を参酌して編輯したるものなり…／…大西祝先生は一々校閲の労を取られたり
大西祝『西洋哲学史』 (上・下巻、1895?)	参照：古代哲学史では次の文献を参照。E. Zeller, <i>Philosophie der Griechen</i> (1844–52); <i>Grundriss der Geschichte der Griechischen Philosophie</i> (1883)。近世哲学史以後は次の文献を参照 J. E. Erdmann, <i>Grundriss der Geschichte der Philosophie</i> , 1866. 参考：早稲田大学（東京専門学校）講義（口述、網島栄一郎、五十嵐力の文に大西加筆。1903年出版の全集（警醒社）参照。附録に「西洋哲学史用語和原対訳表」あり
西田幾多郎「ヒューム以前の哲学の発達」 (1896)	参考；収録：『北辰会雑誌』掲載。内容：ベーコンとデカルト／ロック／バークレー／結論
中島力造『列伝体西洋哲学史』 (1898、富山房発兌)	「凡例」：本書編纂の方法に就て…編述者が…泰西哲学者の性行及び其学説を口授し、他人をして之を筆記せしめ、其原稿を訂正し以て編成したるものなれば、…書中前後文体の一樣ならざる所あり、又訳語の一定せざるものあり、／書中未だ適当なる訳語の一定せざる文字並に哲学者の姓名には原語を附し置きたり／本書編纂の際参考したる哲学史其数甚だ多く、大約三十種以上上る
蟹江義丸『西洋哲学史』 (1899、博文館)	「例言」：本書参考せし所の哲学史はツエルレル〔Zeller〕、フィシエル〔Kuno Fischer〕、エルドマン〔Erdmann〕、ユーベルエヒ〔F. Ueberweg〕、井ンデルバンド〔Windelband〕、ファルケンベルヒ〔R. Falkenberg〕、エーベル〔?〕、シユエグレル〔Schwegler〕等となす…
三宅雪嶺『希臘哲学史』 (1899)	参考；哲学館第15学年度高等学科講義録
加藤玄智『問答体哲学小史』 (1900、右文館)	参照：Christian Gustav Johannes Deter の哲学史問答： <i>Kurzer Abriss der Geschichte der Philosophie</i> 参考：クノーフィツシヤーの哲学史で哲学概論に当たる内容を付録につけている。哲学館で行った講演の一部
三宅雪嶺『近世哲学史』 (1900)	参考；哲学館第15学年度高等学科講義録

波多野精一『西洋哲学史要』 (1901、大日本出版)	「序」：是種の著書には既に加藤氏の「問答体哲学小史」と蟹江氏の「西洋哲学史」とあり。されど前者は問答体を用ひある西洋の著書を翻訳したるもの其の大部分を占め、後者は叙述体を用ひ且つ自著に出づと雖も、其の叙述いかにも直訳的にして人をして理解に苦ましむ 参照：K. Fischer, Eduard Zeller (1814-1908), Johann Eduard Erdmann, W. Windelband, Richard Falkenberg (1851-1920), Harald Høffding, Weber, Friedrich Ueberweg, Friedrich Albert Lange (1828-1875), John Burnet (1863-1928), 中島力造『列伝体西洋哲学史』、大西祝『西洋哲学史』
独逸博士クーノー、フィッシャー原著・加藤玄智訳述『哲学史要』 (1901、同文館)	参考：K. Fischer, <i>Geschichte der neuern Philosophie</i> の抄訳。この原書は現在 10 巻本が最も知られている。
独逸井ンデルバンド原著・桑木巖翼抄訳『早稲田叢書・哲学史要』 (1902、早稲田大学出版部蔵板)	「序言」：Strassburg 大学教授 W. Windelband の <i>Geschichte der Philosophie</i> [1878-80] の抄訳
法貴慶次郎『中世哲学史綱』 (1903)	「表紙」：東京師範学校・教諭・法貴慶次郎『中世哲学史綱』／東京金港堂書籍株式会社 「緒言」：中世は近世の母なり、近世文明の花実…然りと雖其想や秘にして幽蓋し学者の最も了解に苦む所、之れをもつて往々名を暗黙に托して葬り去らとする弊あり。洵に惜むべし…敢て此書を公にしたる所以は、或は一燈の微光ともなり／…地名人名の国訳に關しては、通俗ならんを希ひて、主として英風に由れり…／特にエルツマン氏 [Erdmann]、ユウベルウエイヒ氏 [Ueberweg]、シュウエルゲル氏 [Schwegler]、ウエイベル氏 [Weber] …就中ウエイベル氏の書に負ふ所最も多く [原文はカタカナ]
北沢定吉『哲学史綱』 (1906、弘道館)	「序」：フィッシャー [K. Fischer]、エルドマン [Erdmann]、ウインデルバンド [Windelband]、ファルケンベルヒ [Falkenberg] 等幾多の哲学史、キュルペ [Oswald Külpe]、エルサレム [Wilhelm Jerusalem]、ウント [W.M. Wundt] 等多くの哲学概論を閲読して、多かれ少かれ其教を受けしは言ふ迄もなく…
岡島誘『最近西洋哲学史』 (1906、博文館)	「序」：エルドマン [Johann Eduard Erdmann] の近世哲学史 [August Erdmann, <i>Geschichte der neueren Philosophie</i> (1869)]、ファルケンベルヒの近世哲学史 [Falkenberg, <i>Geschichte der neueren Philosophie</i> , 1871]、ホエフディングの近世哲学史 [Harald Høffding, <i>Historical-Critical Presentation of Modern Philosophy</i> (原文はデンマーク語)]、ユーベルウエツヒ [Friedrich Ueberweg]、ハインツエの十九世紀哲学史 [August Heinze, <i>Geschichte der Philosophie des 19. Jahrhunderts</i> ]、ボーウエエンの近世哲学史 [F. Bowen, <i>A History of Modern Philosophy</i> , 1877]、アイスレルの現今の独逸哲学 [Eduard Zeller, <i>Die Philosophie der Gegenwart in Deutschland</i> , 1858]、ラビブルール [Labriolle] の仏国に於ける近世哲学史、ケーニヒ [Edmund König] の仏国哲学史等を…

この時期は、明治以後初めて西洋哲学史への関心が高まった時期であり（船山, 1999: 34-35 頁）、1895 年に大西祝の『西洋哲学史』が刊行されたのを契機に、1900 年代に入ると単なる翻訳や抄訳を超えた独自の視点による西洋哲学史が次々と出版されるようになった（船山, 1999: 50-51 頁）。

西周（1829-1897）の 1870 年代の試み<sup>22</sup>を除けば、最も初期の書物に、末松の『希臘古代理学一斑』（1883 年）が挙げられる。三枝も上記の引用文の続きで末松の哲学史より初期の哲学史を紹介している。これは末松が「ロンドンにて在英の日本の学生に講述した」ものと知られる（三枝, 1972: 72 頁）。

そして重要な書物に、井上哲次郎と有賀長雄が 1883 年から 1885 年にかけて書いた全 6 巻の『西洋哲学講義』がある。その「緒言」で述べられる出版動機は、明治初期における西洋哲学史の受容

<sup>22</sup> 日本語による表記が試みられた最初の西洋哲学史として、西周の「生性発蘊」、私塾「育英舎」で行われた講義を記した「百学連環」を挙げておく。どちらも 1870 年代のものと推定されている（大久保編, 1960; 1981）。

を支えた問題意識を物語っていて興味深い。また、Ⅱで確認したように、安倍が講義の準備に使った参考図書がすでにこの時期に現れていることがわかる（以下、下線は原文のママ）。

方今文運隆盛、各専門ノ学大ニ興ル、然レドモ独リ哲学ヲ講ズルモノニ至テハ寥々聞ユルナシ、夫レ泰西文明ノ原因固ヨリ数フベカラズト雖モ、然レドモ希臘以来ノ哲学者ガ人心ヲ啓発シタルノ効、実ニ浅尠ナラザルヲ覺ユ、余是ヲ以テ頃口門生ノ為メニ、シユウエグレ リュウ井ス ユーベルウエグ 諸氏ノ哲学史ニ拠テ西洋哲学ノ概畧ヲ講述シ以テ東洋哲学ヲ興サンコトヲ企画スレドモ、遠地ノ人并ニ他ノ事業ヲナス人ハ与リ聞クヲ得ズ、故ニ既ニ講述セシ所ノ旨意ヲ略記シ、以テ世ニ公ニス、看官若シ余ガ微衷ノ存スル所ヲ諒察セバ幸甚（井上・有賀、1883）

当時、唯一の官立大学の卒業生であった彼らは、単に西洋哲学を講義するために西洋哲学史を受容したのではない。東洋哲学の体系を立てるという目標が述べられているのだ。周知のように、井上哲次郎は、1880年に東京大学を卒業した直後に文部省と編輯局兼官立学務局で勤務する傍ら、編輯局で「東洋哲学史」の編集に従事した。1882年に母校の助教授として赴任した際にもこの編集作業を継続して行い、1883年9月、母校に「東洋哲学史」科目が新設された際にはこれを担当した（井上、1973: 8-10）。その内容は、1883年に刊行された末松の『希臘古代理学一斑』と同様、古代哲学史にとどまった。井上らが参照した書物としては「シユウエグレ リュウ井ス ユーベルウエグ」であったという。そこで『東京帝国大学洋書目録』（東京帝国大学附属図書館、1938; 1939; 東京大学図書館、1955）を参考に具体的な参考文献を推測すれば次のようになる。

- ① A. Schwegler (1819–1857), *Geschichte der Philosophie im Umriss; Ein Leitfaden zur Übersicht*, 1861.<sup>23</sup>
- ② George Henry Lewes (1817–1878), *The Biographical History of Philosophy from its Origin in Greece Down to the Present Day*, 1845–1846.
- ③ F. Ueberweg (1826–1871), *History of Philosophy, from Thales to the Present Time*, 1872–1874.

この中で、②ルイスの哲学史は（現在の我々が読めるレベルの）日本語で書かれた最初の西洋哲学史といわれる西周の「生性発蘊」や、彼の育英舎での講義録「百学連環」においても参照された書物である。

次に、有賀長雄が1884年から2年にわたって全3巻として刊行した『近世哲学訳解』は、序文に、

今此に月を追て訳解印行せむとする「近世哲学」ハ、近世欧州人の思想進歩の精粹と為すへき分のミを抜抽して簡明平易に叙述する者也、〔……〕就中かんと、ふいひて、せるりんぐ、へ

<sup>23</sup> 『概要からみる哲学史』と訳される。完全翻訳本は、1939年に『西洋哲学史』と銘打って岩波書店から出版された。翻訳者は、谷川徹三・松村一人。

いげる等の如きハ近世思想の絶頂に達したる者とも謂ふへきに、不幸にも其言辞佶偲文章晦渋にして、最も理會し難きに因し〔……〕此書の著者ふらんしす、ぼうゑん氏〔……〕余の師ふゑのろさ氏も其高弟なれも（有賀, 1884）

といい、「思想進歩」を目指すという同時代の意識を共有していたことがわかる。「平易」さを求めて本文の上段には注釈をつけており、哲学者の名前もすべてひらがなで記している。また、序文の内容から、東京大学で哲学史を教えていたフェノロサの師であった Francis Bowen (1811–1890) の *Modern Philosophy from Descartes to Schopenhauer and Hartman* (1877) を翻訳したことがわかる。

フランスの哲学史家、クザン (V. Cousin) の英語訳に基づいた竹越与三郎『近代哲学宗統史』(1884 年、丸善)、中江兆民の『理学沿革史』(1885–1886 年、文部省) もフランスの哲学史に基づいて書かれた。中江は当時、文部省の嘱託としてフィエーの哲学史を「理学史」という題名で訳出した<sup>24</sup>。一方、三宅雄二郎(雪嶺)の『哲学涓滴』(1889 年、文海堂)より、クーノ・フィッシャー (Kuno Fischer, 1824–1907) の哲学史が参照されはじめる。フィッシャーは、デカルト以後のドイツ哲学界について多くの著作をなした哲学史家で、その中でも約 20 年をかけて全 10 巻を書き上げた近世哲学史 (*Geschichte der neueren Philosophie*, 1852–) は、戦後まで様々な形で翻訳された。とくにカントとヘーゲル哲学に関する抜粋訳<sup>25</sup>、そして『ヘーゲル伝』(*Hegels Leben, Werke und Lehre*, 1901)<sup>26</sup>が知られる。以前まではルイス、ボーエンという英語圏の哲学史や、クザンなどのフランスの哲学史も参照されたのが、この三宅の哲学史をきっかけに、ドイツ哲学を中心とした西洋哲学史が紹介されるようになった(藤田, 2008: 97 頁)。三宅は井上と同様、東京大学の初期卒業生であった。

すでに確認したように、帝国憲法が公布された 1890 年まで、古代から近代に至る通史的な哲学史は井上円了の『哲学要領』が最初であったが、分量の多くは古代哲学に割かれていた。西洋哲学史と呼べる体系が完成したのは大西祝においてである。教育面でいうと、井上円了が 1885 年に東京大学を卒業し、1887 年より哲学館(現、東洋大学)で教鞭をとっていた時期、東京専門学校では帝国大学を 1889 年に卒業した大西が西洋哲学史を教えていた。「〔大西〕先生の口述を綱島〔梁川〕と五十嵐〔力〕が筆記した文章を先生が加筆」したもので、最初の講義は 1896 年春に始まり、翌年の冬に終わったという記録がある(平山, 1989: 217 頁)。

その後、1900 年代に刊行された哲学史のほとんどは東京帝国大学哲学科を卒業した者によって書かれる。蟹江義丸(1897 年卒)、加藤玄智(1899 年卒)、波多野精一(1899 年卒)、桑木巖翼(1896 年卒)、岡島誘(1904 年卒)、北沢定吉(1902 年卒)といった人々がその担い手である。桑木巖翼の『西洋哲学史要』と加藤玄智の『哲学史要』が特定の著作を翻訳したもので、前者がヴィンデルバントを、後者がクーノ・フィッシャーを抄訳した。一方、これまで参照されてきた諸文献を網羅

<sup>24</sup> この書物は、「哲学」の概念史においても問題作として取り上げられる。この点については三宅雪嶺(1946: 33-34 頁)を参照。

<sup>25</sup> クーノ・フィッシャー著、大関増次郎訳(1922)『カント哲学批判』大同館書店；クーノ・フィッシャー著、坂上絢一郎訳(1929)『ヘーゲル哲学概説』白揚社；クーノ・フィッセル著、田村実訳(1936)『ヘーゲル精神哲学概要』上・下、改造社。

<sup>26</sup> 代表的な翻訳に、クーノ・フィッシャー著、甘粕石介訳(1935)『ヘーゲル伝』三笠書房。

している哲学史に、前章で言及した波多野精一（1877–1950）の『西洋哲学史要』（1901）を挙げねばならない。彼が参考にしたものには、大西祝の『西洋哲学史』、中島力造の『列伝体西洋哲学史』（1898）を言及している他に、クーノ・フィッシャー、ツェラー（E. Zeller）、エルドマン（J. E. Erdmann）、ヴィンデルバント、ファルケンベルク（R. Falkenberg）、ホーフディング（Harald Höffding）、ウェーベル（A. Weber）、ユーベルヴェーク（F. Ueberweg）、ランゲ（F. A. Lange）、バーネットがある。波多野が参考とした哲学史家はみな、渡邊二郎が「古典的な大型の概説書」として取り上げる哲学史の著者たちであった。

ヘーゲルにおいては、体系的論理と歴史的展開とがあまりにも強引に結びつけられていたことへの批判から、19世紀後半以降に、折からの内在的な歴史研究の着実な進展とも見合って、西洋哲学史の最も基本的な文献的学問的な研究とそれによる概説書の刊行が、ようやく開始され出したと見得る。そこに、たとえば、ツェラー、シュヴェーグラー、フィッシャー、エルトマン、ユーバーヴェーク、ヴィンデルバント、ファルケンベルク、フォアレンダーなどの古典的な大型の概説書が出現し、その後、その流れは、ヒルシュベルガー、ブレイエ、コプルストンなどの試みにも受け継がれ、またその間に、ジルソンやラッセルなどの独自の西洋哲学史観も現れた。（渡邊, 2004: vii - viii頁）

ここで挙げられる哲学史は、「今日われわれが手にしている哲学史」でもあり、「基本的に19世紀後半から20世紀にかけて新カント派の影響下において成立した哲学史」である（日下部, 2000: 1頁）。なかでも波多野の哲学史は、クーノ・フィッシャーの「九卷六千余頁の『近世哲学史』より学び得たる所最も多」かったという（波多野, 1949: 3頁）。また、「幾多の哲学史の著作の中で」「独自の生命を保ち続け」（波多野, 1979: 270頁）、1947年の時点ですでに132版を記録した。上記したように、安倍は波多野が東京帝国大学の講師だった時に彼に学んだだけでなく、卒業後も彼の自宅を訪ねていたようである。研究会の様子を次のように回想する。

当時宗教学を担任して居た姉崎正治教授がフランスに出張した為、早稲田大学の教授だった波多野さんが、その不在中の講義をするために講師として出講されたのであつて、私の入学した年の翌年の四十年度であつた。〔……〕私達は東大在学中から先生の家庭に親しむやうになり、卒業後だつたと思ふが、波多野さんのお宅で輪読会をやつてもらふやうになつた。その顔ぶれは石原謙、阿部次郎、宮本和吉、小山朝絵などの外に、始は田辺元も加はつて居た〔……〕〔。〕波多野さんは夫人泰子さんとの間には子がなく、我々は恰も息子の如く家庭的空氣に浴して居た。始めヘーゲルのエンツクロペディ（哲学体系）を少し読み、それから同じ著者の“die Phaenomenologie des Geistes”（精神現象学）に移つた。この本はヴィンデルバント<sup>ママ</sup>の「近世哲学史」にも、“viel anspielt, aber wenig gelesen”（多く引証されるが殆ど読まれぬ）といはれる程の難解の書であつて、恐くドイツ人も通読する者は稀だつたのであらう。（安倍, 1966: 412-414頁）

上記の引用文には京城帝大「哲学、哲学史」第二講座担任の宮本の名前も見え、彼らは波多野の自宅でヘーゲルの哲学体系や精神現象学を輪読していたことが窺える。

#### Ⅳ. 帝国大学と西洋哲学史：フェノロサおよびケーベルを中心に

1877年に東京開成学校が東京大学に名称を変更した際、歴史上初めて「文学部」というものが設置され<sup>27</sup>、その中に「史学、哲学及政治学科」が置かれた。当時の資料によれば、哲学、哲学史、論理学、道義学、心理学といった科目名で講義が行われたという（東京大学百年史編集委員会編、1986: 414頁）。1881年に哲学科が独立し、そこに「世態学」「審美学」「印度及支那哲学」といった新設科目が追加されていき、講座制導入（1893年）の際にはそれぞれ講座名として定まった。

西洋哲学史の受容と関連して、漢字圏において西洋哲学の内容が如何なる制度と名称のもとで定着し、如何なる内容で埋まっていったかという点は依然として重要な問題であるが、本稿ではその詳細には触れないことにする<sup>28</sup>。ただ、講座名としての「哲学、哲学史」という名称が、哲学科が独立する以前から科目名として意識されていた点を指摘しておく。初期の哲学史講義で重要な役割を果たしていたのは、西洋の書籍を用いて哲学を教えていた外国人教師であり、その中でも重要な人物がフェノロサであったことは周知の通りである（山下、1975）。彼の任期が長かったのもそうだが、彼の授業は学生たちの記憶に「本格的な哲学の授業」として残された。彼の前後に東京大学で西洋哲学を教えた5人の西洋人講師<sup>29</sup>については西尾浩二（2012）が詳しい。なお、彼らの赴任のあり方自体が哲学科の制度化と密接な関わりを持つという点も付け加えておきたい。学科制度や講座制が定まる以前の時期において外国人講師たちはさまざまな複数の科目を担当していた。例えば、サイル（Edward W. Syle）は東京開成学校で「修身学及歴史学」を、フェノロサは「政治学及理財学」を担当した。この意味で、1880年代の初期に西洋哲学史を書いた井上哲次郎は日本最初の「哲学科」教授であったといえる。実際にも、大学南校時代（1869-）から法理文学部時代（-1886）まで大学が刊行した教科書の目録にみえる哲学関係書物は、井上らが編纂した『哲学字彙』（1881年）が唯一であった（東京大学百年史編集委員会編、1985: 1125頁）。東京大学が帝国大学となる直前にあって、「東洋哲学史」の執筆を目指して西洋哲学史を熱心に読み、それを日本語体系中に定位しようとした知識人が「哲学科」の最初の教授だったという点は意味深い。辞典の編纂が西洋哲学史を執筆するうえで不可欠な作業であったことはいうまでもない<sup>30</sup>。

以下では、先行研究を参考にフェノロサの哲学史講義の様子を確認した後、安倍の師であった

<sup>27</sup> 「本学部〔文学部〕は明治十年法学部及理学部と共に東京大学に設置されたるものなるが、法学部及理学部が何れも旧開成学校の法学部及理学部の事業を継承せると異にして、全く新に設置せられたるものに係る」（東京帝国大学、1932: 658頁）。

<sup>28</sup> 三宅（1946: 32-34頁）からは「哲学」という言葉自体に不慣れであった大学の様子が伝わる。なお、以下の指摘も「哲学」とは異なる他の用語の可能性を想起させられて興味深い。「若し旧幕時代に明清の学問が今一層入込んでをつたならば、哲学の語が出来ず、理学と解する事になつたらう。支那の学問が相当に入込みながら、明清の紹介が晩く、後に漸く考証が盛んにならうとした処で幕府が瓦解した。清朝の初めに孫奇峯（康熙十四年歿）〔1584-1675〕の『理學宗傳』が出で、次いで竇克勤（康熙四十七年歿）〔1653-1708〕の『理學正宗』が出で、孰れも宋儒を主としつつ、支那の哲学史と称すべきであつて、それが我が聖堂を初め、諸藩の学校に読まれたならば、理学と云ふものが如何なる性質のものであるかを知り、フィロソフィに接し、西洋の理学と認める事になつたらう。蘭学者及び英仏学者が此等の書を読んだならば、フィロソフィに『理学』の語を当て嵌めたらうと思はれる」（三宅、1933: 87頁）。

<sup>29</sup> Edward W. Syle（以下、赴任期間：1874.11.-1879.4.）、E. F. Fenollosa（1878.8.-1886.8.）、Charles James Cooper（1879.4.-1881.7.）、George William Knox（1886.9.-1886.12.）、Ludwig Busse（1887.1.-1892.12.）。

<sup>30</sup> 井上らの西洋哲学史が東洋哲学史を目指していたことと関連して、『哲学字彙』には「清国音符」（初版）と「梵語対訳仏法語彙」（改訂増補版）が附録として加えられていた。

ケーベルの哲学史講義について触れておく。

まず、年報から摘記してみる。なお数字をアラビア数字に、カタカナをひらがなに変更するほか、仮名遣いも現代仮名遣いに改めた。

1878 年より 1879 年に至る学年中余が教導せし文学部生徒は各級に従い次の学科を履修せり。  
（第一）文学部 2 学年に哲学史を修めしむ。

本科においてはデカルトよりヘーゲル、スペンサルに至る近世哲学の大意を授く。但し、古代希臘哲学並に希臘淵源の中世哲学は實際上日本人には大益を期し難しと思惟したるに由り、これを省けり。然るにデカルト以来の哲学に至ては古代の哲学とは全く別派なるのみならず、今日思想の発達の端緒ともいふべきものなれば、すなわちここにこの時代以下を取めたり。而してこの科においては特に欧州近代の思想進歩の状況を教示するを持って目的とせり。これゆえに、シュエグラ氏著す所の哲学史を用い、ただし多くはこれを口授し、かつ、これに関する哲学各派の要論を講授し、その間時々加えるに諸記あるいは筆記の試験を持って生徒に将来諸哲學家の著書中について十分その真旨を了得せしむるの学力を得せしめたり。（東京大学史史料研究会編, 1993a: 128-129 頁）

1879 年より 1880 年まで〔……〕文学第 2 年級生徒には前年と等しく<sup>ママ</sup>比しく講義を用いて哲学史を講習せしめシュエグラル及びリユイスの著書を以てその参考書となす。けだしこれ専らデカルトより今日に至る近世哲学の実録に係るがゆえにその生徒の智見を開発する。（東京大学史史料研究会編, 1993a: 164 頁）

フェノロサは「今日思想発達の端緒」を知るため「實際上日本人には大益を期し難し」という理由で、近世哲学講義に集中したと述べている。ここにも明治初期の哲学史で多く参照されたシュエグラの哲学史とルイスの哲学史が言及されている。1881 年に哲学科が独立すると「教員受持学科表」にフェノロサは第 3、4 学年の「哲学」担当教師として登場する（東京大学史史料研究会編, 1993b: 123 頁）。内容は「哲学第 2 年生〔……〕第二第三の両学期間は専ら近世哲学史を講授したり。けだし哲学史講義の時間は前学年には毎週 2 時なりしも本年に至り毎週 3 時と更改したるにより〔……〕第 3 学年には全学年間ヒューム氏著人性論并にカント氏著純理論に就きて講授したり第 4 年生には全学年間カント氏著純理論及びワレス氏訳ヘーゲル氏著論理学を講授したり」（東京大学史史料研究会編, 1993b: 184 頁）とある。この内容から、2 年生には「専ら近世哲学史」を教えたこと、3 年生とはヒュームのおそらく『人間本性論（*A Treatise of Human Nature*）』とカントの『純粹理性批判』を、そして 4 年生とはカントの他にヘーゲルの論理学を、ウォレス（William Wallace, 1843–1897）の英訳（1873 年）で読んだことがわかる。翌 1882 年度と 1883 年度（1883.9.–1884.12.）の申報内容も類似する。そのなかで興味を引くのは、2 年生にカントの『純粹理性批判』を「通読」させ、その後にヘーゲルまでの哲学史を熟知させたのは 3 年生から「一層多時をヘーゲル哲学教導」に用いるためであったことである（東京大学史史料研究会編, 1993b: 406 頁）。これは、坂谷芳郎（東京大学政治学科を 1884 年卒業、1863–1941）がフェノロサの哲学講義を筆記した次の内容とも関わる。フェノロサはヘーゲルを非常に高く評価し、「もしスペンサーの進化論とヘーゲルの哲学を統合することができれば、完全な哲学が完成するだろう。そして、これが今後 30 年から 40 年以内に達成されると私たちは信じている」と述べたという（山下, 1975: 149 頁）。すなわち、

フェノロサにおいて近世哲学の完成型こそヘーゲル哲学だった。三宅も次のように回想する。

1878年8月、米国人フェノロサが来学し、最初予備門にて経済学を担当し、大学で哲学を担当した。哲学科が独立しない間のこと、フェノロサの授業が頗る面白く、学生の注意を唆つた。それまで哲学は外山教授がスペンサーの第一原理を主にしたのをば、フェノロサが簡単にデカルトから初め、カント、フイヒテ、シェリング、ヘーゲルまで雄弁に説き立て、僅かの期間にドイツ哲学を紹介した。これは英学者が前に概ね知らず、世間に知れなかつたところであつて、今更のやうに耳新しく聞え、哲学とはさういふものかと人が興味を覚えるところがあつた。〔……〕フェノロサは後に哲学のみを担当し、自分は哲学科で一人、いはば教師一人学生一人、といふ関係になつたが、フェノロサはドイツ語に通ぜず、英訳でヘーゲルの書を読んだり、ヒュームの書を文字通りに読んだりするので、少しの特長なく、特長なければ自身で随意に読書して足るの状態であつた。(三宅, 1946: 35-36 頁)

上の引用文と関連して、他の回顧においても「日本に独逸哲学を紹介したのはフェノロサであつたけれども、当人自ら未だ深く研究せず、独逸に往つて研究したいと云つて居り、後に日本美術に興味を覚え、之に没頭し、哲学を去つた。授業中に学生の参考書としたのは独人シュエーグレル哲学史の英訳であつて、別段に指定せず、学生自ら図書館で読み、講義以上に諒解したのは米人ボウエンの近世哲学であつた。ボウエンはハーヴァート大学に於けるフェノロサの師匠の由」(三宅, 1933: 91) と述べている。

フェノロサの後任者としては、当時、東京一致神学校(後、明治学院大学)で神学を教えていたノックスが赴任したが、3ヶ月と期間が短い。彼をはじめ、外国人哲学教師については西尾浩二(2012)を参照されたい。それでは、ケーベルの哲学史講義についてみる。

ブッセの後任者にケーベルを推薦したのはハルトマンだった。「自分〔井上哲次郎〕の知り合であつたエドワルト・フォン・ハルトマンが自分に手紙を寄越してケーベルを推薦したから、直ちに手紙をケーベルに送つて、桜咲く日本に来る気はないかと書いてやつたところが、それが妙に気に入つたと見えて快諾の返事を寄越した」(井上, 1932: 71 頁)。ケーベルはその後約20年間東京帝国大学で「哲学」〔『東京帝国大学一覧』に「哲学」講師と記載されている〕を担当することになる。講座制の初年度から「哲学、哲学史」第一講座では井上哲次郎が教授として、ケーベルは講師として哲学を担当したので、井上とケーベル体制の「哲学、哲学史」講座は20年の長きにわたった。安倍の東京帝国大学在学時期とも重なる。

ケーベルについては広く知られているので、哲学史に関連する重要な経歴だけ簡単に触れておく。彼は1848年にロシアのニジニ・ノヴゴロド(Nizhny Novgorod)に生まれ、1872年にモスクワ音楽学校を卒業した。その後、ドイツに渡り、イエーナ大学に3年間在学、ハイデルベルク大学ではクーノ・フィッシャーの下で博士号を取得した。その後、シュヴェーグラーの『概要からみる哲学史』を教科書用に要約して編纂する作業に携わり(1882年、第11版の刊行に参加)、その仕事を通じてハルトマンと親交を結んだ。この交際を契機に『ハルトマン哲学体系(Das philos. System E. v. Hartmann)』を出版(1884年)した後、ミュンヘンに移り、ショーペンハウアーに関する著作や『復習用哲学史』(1893年)を刊行した(久保, 1923: 1-5 頁)。ミュンヘンで約10年間暮らした後、ハルトマンの推薦を受けて日本に招かれることとなる。

ケーベルに関して本稿は、松井健人と問題意識を共有する。松井は、日本思想史においてケーベルをめぐる歴史記述の「定型」が「教養主義の源流（古典ギリシャ語の習得や原典主義の文献学的読解）」として確立した一方で、ケーベル自身についての検討はこれまでほとんど行われてこなかったことを指摘する。同時に、安倍ら漱石門下生を含む、ケーベルの講義を受けた学生たちは、その内容をほとんど理解できなかったことにも触れている（「日本語を全く話せず、英語、ドイツ語、古典語が混ざった講義」）。また、講義に欠かさず出席した学生たちの動機も、「学識を広めるということよりは、むしろ講義の時の先生の、如何にものびのびと、ゆったりとした態度や、晴ればれしく神々しい風貌に接したいというのが主なる」ものだったとされる（松井, 2020: 62 頁）。こうした指摘を通じ松井は、従来のケーベル評価が実は中身の無い定型的なものに過ぎないことを見事に明らかにした。そしてこうした評価は、安倍の回想とも一致する。「我々学生がケーベル先生に引かれたのは、その学説よりもむしろその風格と教養とにあつたので、先生の上品にして哲人的な風貌は、それだけで我々を魅する力があつた」（安倍, 1966: 406 頁）。本稿では、西洋哲学史の受容という観点から、講義のタイトルを年度別に再構成しておく。また、講義内容については以下のケーベルの講義録が参照できる（上記したミュンヘン時代の哲学史論については①としておく）。

① *Repetitorium der Geschichte der Philosophie*（復習用哲学史）. 1893.

① *Lectures on Aesthetics and History of Arts*. Tokyo, 1894.

② *Lectures on History of Philosophy*, 2vols. Tokyo, 1894.

③ *An Introduction on Philosophy*. Tokyo, 1895.

①と②は哲学史に関する講義録、③と④は哲学概論書である。③は1893年の「秋冬我文科大学に於て哲学入門（哲学概論及び哲学畧史より成る）として講述せられしものの前半をその原稿に就て翻訳せる」とあり（コエーベル, 1897: 2 頁）、初年度に行った授業内容であることがわかる。また、これら講義録の出版経緯については、「学生諸君が先生から原稿を借り、それぞれ金を出し合つた、たしか秀英舎で印刷されたのです。その頃先生は誤植の多いのは困ると言つて居られました。先生御自身で校正されたこともありました」（長谷川, 1923: 52 頁）という。

安倍の在学時期井上・ケーベル体制の「哲学、哲学史」講座の授業内容について、とくにケーベルに重点をおきながら再構成してみよう<sup>31</sup>。

表 4 ケーベルの哲学史講義

1895.10. <sup>32</sup>	・哲学演習〔1895年当時、3学年学修科目。年間毎週3時間〕：ショーペンハウアー〔以下、表記の混在は原文のまま〕のバレルガ〔 <i>Parerga und Paralipomena</i> <sup>33</sup> 〕、カントの判断力批判 ・哲学史〔1895年当時「西洋哲学史」が1学年の第2、3学期に毎週5時間。2学年では第1学期に毎週3時間〕：第2学期にギリシャ哲学から始める予定。2学年；カント、3学年；授業時間の外にカント以後の哲学を講義 〔井上；「純正哲学、理論的哲学、実践的哲学を終りて、今年は宗教哲学を講じる」〕
1896.10.	・ショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』、ヘーゲル、シェリング、授業時間の外にギリシャ語を講義 〔井上；前年度から続いている原始仏教史は病気のために春学期は休講。復帰後には釈迦哲学、釈迦伝を終える予定。「哲学なる概念に就き綿密なる観察をなしたる上哲学上の問題」を講義〕

<sup>31</sup> 『哲学雑誌』（哲学会, 1887-、毎月刊行）の該当月号の「彙報」をもとに筆者の補充を〔 〕を入れる形で再構成した。

<sup>32</sup> 9月11日より始まる第1学期に開講した授業内容を、毎年10月の彙報欄に掲載したと思われる。

<sup>33</sup> ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』の註釈にあたる。1851年に出版。

1897.10.	・哲学演習：ショーペンハウアーのパレルガ、パウスト 〔井上；パリへ出張〕
1898.10.	・哲学概論、哲学史、美学〔具体的な内容は不明〕 ・哲学演習：1時間はヘーゲル哲学、1時間はショーペンハウの『意志と表象としての世界』を会読。 残り1時間は「哲学史の演習をなす者」が順次講壇に立って講義をなし、自ら批評 〔井上；西洋哲学の受容様相、現象即実在論、東洋哲学史では日本儒教史の続き〕
1899.10.	・西洋哲学史講義に集中。その他、哲学概論、美学及美術史を講義 〔井上；「哲学及び東洋哲学史を講」、哲学では実践哲学の概要として「倫理学宗教学政治学等実践に関する科学の哲学的基礎を論究」、哲学史では日本哲学史の続き、中江藤樹、熊沢蕃山に続き、大塩中齋、山鹿素行〕
1900.10.	・哲学概論〔1学年〕、西洋哲学史〔2学年〕。内容は前年度と同様 ・哲学演習：1時間は復習、1時間は学生自ら講演、残り1時間は「『種々なる世界観及其宗教及道德上の価値』(Ueber die verschiedenen Weltanschauungen und ihren religiösen und moralischen Werth)に就て講述論評」〔書物括弧も原文のママ〕 〔井上；3学年；実践哲学の概要、東洋哲学史では前年度の続きとして日本哲学史〕
1901.10	・哲学概論、西洋哲学史その他、中世哲学一般、ヘーゲル学説に関する特殊講義 ・哲学演習：前年度の続き 〔井上；実践哲学は前年度の続き、東洋哲学史では日本の古学派について〕
1902.10.	・哲学概論、西洋哲学史 ・哲学演習：ショーペンハウの『意志と表象としての世界』、その他前年度の続きとして『ミトロギー〔mythology〕』、2学期より新たな内容として『ポエチック〔poetic〕』〔1911年度の内容からアリストテレスの詩学であると推定される〕を講義する予定 〔井上；実践哲学は前年度の続き、東洋哲学史では日本の朱子学派について〕
1903.10.	・ショーペンハウの『意志と表象としての世界』講読〔おそらく哲学演習授業〕 〔井上；実践哲学は前年度の続き、東洋哲学史では日本の朱子学派について〕
1905.10.	・ギリシャ哲学史、ヘーゲル以後の哲学史、ヘーゲル哲学、基督教発達史この四つの主題で講義。なかでも基督教発達史については10月末よりスタートする予定。その他、授業時間の外にギリシャ語を講義 〔井上；東洋哲学史では「武士道の歴史的及理論的研究」と題して、散逸せる材料中より教授が多年研磨の結果に成りしものを講〔……〕純正哲学は前学年の序論および意識論に引続きて思惟論に入り、認識論にうつる予定なり〕
1906.10.	・西洋哲学史（中世哲学よりカントまで）、ヘーゲルの絶対精神哲学、基督教発達史 ・ギリシャ語（上級及下級） 〔井上；純正哲学（現象即実在論）の続き、東洋哲学史；「武士道の歴史的及理論的研究」の続き〕
1907.10.	・Philosophical Propa[e]deutics and Introduction to Philosophy〔週2時間。以下数字は同様〕 ・History of Philosophy (2), Philosophy and History of Christianity (参考) (1) 〔井上；現象即実在論 (2)、武士道の歴史的及理論的研究 (2)〕
1908.10.	・History of ancient Philosophy (Greek and Roman) (2) ・History of Philosophy (From Kant to Nowadays) (2) ・Mysticism and Occultism in the 19th cent. (1) 〔井上；東洋哲学史（武士道とストイシズム）(3)、哲学概論 (3)〕
1909.10.	・History of Medieval Philosophy, Philosophy of 19C. (The time after Hegel) ・On Goethe's Faust ・ギリシャ語（上級及下級） ・Introduction to Philosophy 〔井上；東洋哲学概論、現象即実在論〕
1910.10.	・Kant Philosophy (2), Greet Philosophy (2) ・General Modern Western Philosophy (2) 〔井上；哲学概論 (2)、東洋哲学史概論 (3)〕

1911.10.	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Philosophical Propaedeutics (Introduction to philosophy) (2)</li> <li>・ History of Medieval Philosophy (2)</li> <li>・ Hegel's Phenomenology (2)</li> <li>・ The "Poetics" of Aristotle &amp; Lessing's Laokoon (1) [Gotthold Ephraim Lessing (1729–1781) の <i>Laokoon</i> (1766)]</li> <li>・ Greek; Reading of Platon's Kriton &amp; Homer (2)</li> <li>・ Greek; Reading of Theokritos (1), Horatius (Carmina) (1) [Quintus Horatius Flaccus が残したとされる詩集、<i>Carmina</i>。『頌歌』として知られる]</li> </ul> <p>[井上；人世と世界、東洋哲学（四聖の研究一主として国民道德二）]</p>
1912.10.	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Philosophie des Altertums, Philosophie der nouern Zeit [古代および近代哲学]</li> <li>・ Griechisch für Vorgeschritten [上級ギリシャ語；Horatius の <i>Ars Poetica</i> (詩論)]</li> <li>・ Boileau; L'Art Poetique [Nicolas Boileau Despréaux (1636-1711) の詩法]</li> <li>・ Die typischen generellen Standpunkt in der Metaphysik und Religion [形而上学と宗教に関する典型的で一般的観点]</li> <li>・ Schillers philosophische Lyrik [Johann Christoph Friedrich von Schiller (1759–1805) の詩の中で哲学的なテーマを選定]</li> </ul> <p>[井上；哲学概論、西洋哲学史概説]</p>
1913.10.	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Philosophial Propaedeutics (Introduction to Philosophy) Connected with a brief History of occidental Philosophy from Antiquity to present times (For Beginners)</li> <li>・ Kant (with special examination of his smaller treatises) and Postkantian philosophy</li> <li>・ History of Christianity</li> <li>・ Schopenhauer "Welt als Wille [u]nd Vorstellung [意志と表象としての世界]", Parerga (reading and interpretation of selected chapters)</li> <li>・ Lessing as poet, critic and philosopher, and reading of his "Nathan der Weise", Reading of Aeschylus' "Prometheus" [古代ギリシャ詩人アイスキュロスのプロメテウス] and Homer's "Odyssee" (for advanced students of Greek), Reading of Virgil's "Bucolica" and Ovidius' "Metamorphose" [古代ローマ詩人バーギルの代表作、田園の歌と、詩人オビディウスの変身物語] (For advanced)</li> </ul> <p>[井上；東洋哲学史、人世と世界]</p>

上記のうち、1906 年より 1909 年までの講義内容が安倍の在学時期と関わる。安倍が「東大時代の講義」（安倍, 1966: 412 頁）において高く評価していたものとして、上述した波多野の講義がある。ケーベルに関しては「学説よりもむしろその風格」に引かれたと記憶していることをすでに述べた。反面、井上の哲学史講義、さらに彼の学問について安倍は次のように極めて批判的に回想している。

井上教授の「日本武士道の哲学」といふのが、必修の講義だつたが、これが実に無準備な出鱈目の粗策極まる講義であつた。[……] この哲学のての字もない人が、スエズ以東第一の哲学者といはれ、その現象即实在論が彼の独創だといふ者があつたのだから、あきれる外はない。人間のよく分かるケーベル先生などは、「彼は別にわるい人間ではない、ただスチューピッドなだけだ」といつて居られたが、井哲氏はケーベルさんが日露戦争の時にも、世界がよつてたかつてドイツを攻めている時にも、日本に留まつて講義をして居ることを陰で攻撃して居た。[……]

京都大学は後に西田幾多郎博士と田辺元博士とを得て、独特な学風を発揮した。[……] 井上博士によつて創られた東大文学部の哲学科が、京都大学に比して萎靡不振を極めた原因は、井上さんが哲学者でも学者でもなく、又真面目な人間生活の追究者でも何でもなかつたのに基づく。(安倍, 1966: 409-411 頁)

さらに、井上が「自己の無知を恥ぢ」ない、「文学部の長老を惰性的に続けることを許した」「東大文学部の屈辱」であつたと語る。個人の回顧をそのまま受け入れることはできないが、当時、西

洋哲学を志していた「哲学、哲学史」専攻の学生たちが、井上よりもケーベルの周辺に集まっていた可能性は容易に想像できよう。松井が指摘するように、ケーベルに関しては講義よりも彼の雰囲気や彼との個人的関わりに言及するものが多いが、それでも講義に関する学生たちの記憶に注目してみるならば、まず久保はこういう。

わが大学にギリシヤ語の研究を導入したのも実は先生であつた。先生はその講義を単に哲学の領域にのみ限らなかつた――一般詩学、<sup>ママ</sup>基督教の歴史及び哲学、ゲーテのファウスト、その他の如き題目についても亦好んで講ぜられた。(久保, 1923: 5 頁)

この言及は上記の授業内容を圧縮して伝えている。また、安倍や久保より早い 1899 年に東京帝国大学を卒業した西晋一郎 (1873–1943) は、ケーベルの哲学史講義、また彼の哲学史観に言及して興味深い。

哲学の門に私が導き入られたのは先生の賜である。西洋哲学の多くの「ターム」の意義を説き示されたことがすでに研究の武器を授けられたのである。[……] 而して是は哲学史の智識の該博且つ明確なる人の教示に俟たねばならぬ。初学者が此所から入らずして、初から部分的専門的且つ主観的に思弁的な説を聴くは健全なる進学には不利であらうと思ふ。先生の哲学概念は哲学史の概要であつた。一般に先生は哲学とは哲学史であると言つておられたが、是は必ずしもヘーゲルの説に依られたといふのみでなく哲学に入る正道順路は此の外にないと認められたのである。且つ先生は恐らく其哲学史的知識の精到なるため真に新らたなる思想といふべきものを認められず、又一つには故らに自分の説として立てるといふ如きを性来好まれなかつた。固より先生の哲学教授が哲学史的であり客観的であつても、其中自ら先生自身の思想の特殊の傾向は見えて居る。(西, 1923: 48 頁)

「先生の哲学概念は哲学史の概要であつた」という言及、そして「哲学とは哲学史である」とのケーベルの言から「哲学に入る正道順路は此の外にないと」という彼の信念を西が読み取ったこと、だからこそケーベルは独創的な思想にこだわるより、与えられた哲学史を「客観的」な材料として重視したことが窺える。

のちに植民地朝鮮の京城帝大に赴任する西洋哲学系講座の教授たちのなかで、田辺重三のような、安倍らより 10 年下の世代を除いた岩波哲学叢書の執筆者たちは、以上の井上・ケーベル体制で西洋哲学を学んだ。

## V. おわりに

ここまでの内容をまとめてみよう。

西周が西洋哲学史を私塾生たちに日本語で伝えるため、ルイスの著作を参考に哲学者の名前をカタカナで表記し、概念を漢字に置き換える試みを行ったのは 1870 年代であった。その後、近代的な教育制度が整備されていくなかで、1880 年代から 1900 年代にかけて西洋哲学史に関する刊行物が集中して出版された。初期の東京大学で西洋哲学を学んだ学生たちは多くの場合、外国人教師を

通じて西洋哲学史の英語版に触れ、卒業後にはそれに基づいて専門学校や帝国大学で教鞭をとった。また、研究のために日本語に翻訳した。その過程でいくつかの書籍が中国の知識人の目に留まり、漢訳されたものがさらに朝鮮の開化知識人にまで伝わったことも重要である。本稿と関連しては、朝鮮末期と大韓帝国時代に、李定稷（1841–1910）、李仁宰（1870–1929）、李秉憲（1870–1940）といった朝鮮の開化知識人たちが、梁啓超の『飲氷室文集』に紹介された西洋哲学関連の文章<sup>34</sup>、そして井上円了の『哲学要領』、中島力造の西洋哲学史の漢訳に接した（李, 1994）。

1900年代に入ると、通史的な哲学史よりも、論理学、倫理学、美学と、より細分化された哲学史が出版されるようになる。同じ時期、東京開成学校時代に赴任していたフェノロサなどの外国人教師たちが用いた洋書は、日本語による刊行物に直接的な影響を与えた。フェノロサが参照したシュヴェーグラーやボーエンの哲学書はそのまま1880年代の東京大学卒業生たちによる哲学書の重要な参考書となった。その後、「大日本帝国憲法」の公布を前後に、ドイツ人教授（ブッセ、ケーベル）たちがドイツ語の原書を用いて哲学を教え始め、多くの学生がドイツへ留学するようになった。

ヘーゲルの哲学史以後に成立した「西洋哲学史の古典」と呼ばれる書籍群は、それ自体、当時のヨーロッパやアメリカの大学で哲学を世俗化する役割を果たしたものである。20年間にわたり帝国大学で哲学を教えたケーベルという人物は、まさにその過程に参加していた一人であった。クーノ・フィッシャーのもとで博士号を取得した彼がまず行った作業が、シュヴェーグラーの『概要からみる哲学史』を教科書用に要約することだったのである。そして、彼に学んだ安倍も明治初期から参照されてきた「西洋哲学史の古典」に触れながら西洋哲学を学び、その過程でヴィンデルバンツに依拠した西洋哲学史を刊行した。京城帝大に赴任した際にも岩波の「問題史的哲学史」シリーズの一環として『道德思想史』の刊行がなされた。だが、ケーベルにしても、安倍にしても、彼らが残した哲学史を読む人はもはやいないだろう<sup>35</sup>。19世紀以後、「近代的啓蒙主義、理性主義のもとに成立した」（日下部, 2000: 1頁）大型の「西洋哲学史の古典」が、戦前日本において絶えず参照されたという事実を確認させてくれる事例としてのみ、彼らは学術的意味を持つのかもしれない。そしてもう一点、「西洋学者の著述の焼き直し」が「内地」のみならず「外地」の帝国大学の哲学科までを舞台にしていたといえ、これはあまりにも当然のことだろうか。

かつて私は岩波書店の「倫理学講座」に載せた『西洋道德思想史』の出版を頼んだところ、岩波はイエスと言わなかった。これは誰かの評価に従ったものであろうが、私自身もそれは西洋

<sup>34</sup> 彼らがとくに注目したと推測される西洋思想関連文章に、「論希臘古代學術」（1902年）、「亞里士多德〔アリストテレス〕之政治學說」（1902年）、「近世文明初祖二大家之學說」（1902年、ペイコン、デカルト、ホッブズ、スピノザ、ロック、ライプニッツ、ヒューム、ヴォルフに関する概説）、「樂利主義泰斗邊沁之學說」（1902年）、「近世第一大哲康德〔カント〕之學說」（1903年）などがある。その他にも、1902年から1903年の間に執筆された西洋の進化論、自然法、政体論に関する文章、「進化論革命者頓德〔Benjamin Kidd〕之學說」（1902年）、「天演學初祖達爾文之學說」（1902年）、「法理學大家孟德斯鳩之學說」（1902年）、「政治學大家伯倫知理之學說」（1903年）などを見ただろう。梁啓超（1932）を参照。

<sup>35</sup> 「しかし今の日本では、安倍能成という名前を覚えているのは私たちから上ぐらいの人でありまして、〔……〕安倍能成の著作で、いま文庫本なんかに入っているものは一つもないようであります。そして安倍能成にはドイツ近代哲学に関する本が戦前いくつもあったのですが、そういうものはもう一切読まれていないようであります。カント哲学とか、あるいは近世・近代ヨーロッパ哲学史とか、そういうものについての概論書のようなものを数冊、岩波書店から出しておりましたが、そんなものもうあまり読む人はなく、忘れられているようであります」（芳賀, 1994: 161頁）。

学者の著述の焼き直しで、ちょっと便利な書物ではあるが、別に岩波書店の重きを成すものだという自信もなかったのも、その拒絶を甘受した。(安倍, 2012: 402 頁)

安倍が植民地朝鮮で書き終えた『道徳思想史』は、結局、岩波書店から出版されることはなかった。

このように安倍による西洋哲学史まで視野に入れてみると、日本における初期の西洋哲学史とケーベル以後のそれには大きな違いや隔たりがあったといえる。初期の翻訳書には、後にみられるような言葉や文体の洗練性が確かにない。だが、井上や有賀が序文に記したように、そこには「泰西文明」の起源を学ぼうとする強い目的意識、すなわち「文明化」という目的があった。こうした地点から出発した哲学受容が時代の経過とともにだんだんと洗練性を増していき、帝国大学のアカデミー哲学科でケーベルのもとで学んだ安倍になると、「焼き直しで、ちょっと便利な書物」が生まれる。ここに、西洋哲学史をめぐる日本思想の重要な一面がある。ケーベルは、内容よりも形式面で、すなわち、「古典を重視する姿勢」「原典主義」という側面で、戦前アカデミー哲学科に貢献した。彼は新たな学説よりも「安定的」な哲学史に意義を見出していた。また、ケーベルから「セカンドアベ」と呼ばれた安倍能成も、「私にとつてはやはり、一番勉強や仕事のできた時でもあつた」(安倍, 1966: 557)と回想する時期に、京城帝大において自身の過去の刊行物や、それ以前から参照されてきた哲学史に基づいて哲学史を教えた。彼の教え子たちが「楽しかった」<sup>36</sup>と回想した場は、西洋哲学史という一面からみても「内地」の延長上に、その思考パターンを繰り返す場として存在していたのである。彼らの自意識のみに寄り添う限り、そこに「植民地」は入り込む余地はやはりない。だが、彼らの「楽しみ」の場に、「手足一本がこの上なく貴重な今日」「哲学をすることはどうということなのか」(朴致祐, 1936=2010: 13 頁)を悩む植民地朝鮮出身の学生たちがいたのも事実なのである。

安倍は、京城帝大が植民地の大学として「東洋・朝鮮研究」(齋藤, 1926: 2 頁)機関とされることに対抗するように、よく京城帝大における「西洋研究」の重要性を訴えていた。「ギリシヤの小亜細亜に有したミレトスの町が、ギリシヤ哲学の誕生地であつた事を思へば、京城帝国大学の使命も亦軽からぬものがあることを覚ゆるのである」(安倍, 1926: 17 頁)。この自分の発言を、素直に、真面目に実践した人であったともいえる。

## 参考文献

・日本語

青木一平 (2022)「安倍能成と帝国日本：植民地朝鮮における『共同体』の模索」田中友香理ほか「[第7回「思想史の対話」研究会] いま、共同体／共同性を問い直す」『日本思想史学』第54号。

安倍能成資料, 愛媛生涯学習センター所蔵。

安倍能成 (1916)『西洋古代中世哲学史』哲学叢書第5編, 岩波書店(初版)。

——— (1926)「京城帝国大学に寄する希望」『文教の朝鮮』第10号(京城帝国大学開学記念号), 朝鮮教育会。

<sup>36</sup> 青木は、安倍が「京城帝大を『対話』の学問共同体にしようとした」と、安倍の開校記念式での演説を取り上げながら「実際」に学生はどうだったか、学生の回想を挙げている(青木, 2022: 50 頁)。この「楽しかった」は、池尾勝巳の回想である。池尾勝巳は1934年3月に予科を卒業し、同年に「法学科」に進学した学生であり、彼が回想する「九七会」(昭和7年に京城帝大予科に入学し、昭和9年に本科の法律科に入学した人たちの集まり)のメンバーや活動と安倍との関係は不明である。そして彼が「楽しかった」と回顧した後で挙げる「忘れることのできない教授」に安倍の名はない(池尾, 1974: 660-661 頁)。

- （1937）『西洋近世哲学史』哲学叢書第10編，岩波書店（第5版）。
- （1966）『我が生ひ立ち』岩波書店。
- （2012）『岩波茂雄伝 新装版』岩波書店。
- 有賀長雄（1884）「近世哲学訳解序」ボーエン著『近世哲学訳解』巻一，弘道書院。
- 池尾勝巳（1974）「九七会」京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編『紺碧遙かに：京城帝国大学創立五十周年記念誌』京城帝国大学同窓会。
- 井上哲次郎（1932）『岩波講座哲学・明治哲学界の回顧』岩波書店。
- （1973）『井上哲次郎自伝』富山房。
- 井上哲次郎・有賀長雄（1883）「緒言」『西洋哲学講義』巻之一，阪上半七。
- 大久保利謙編（1960）『西周全集』第1巻，宗高書房。
- （1981）『西周全集』第4巻，宗高書房。
- 小熊英二（2002）『〈民主〉と〈愛国〉：戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社。
- 日下部吉信（2000）「西洋哲学史の再構築に向けて：その基本的視点」渡邊二郎監修，哲学史研究会編『西洋哲学史の再構築に向けて』昭和堂。
- 久野収・鶴見俊輔・藤田省三（1958）「『戦後日本の思想の再検討・第三回』日本の保守主義」『中央公論』第839号，京城帝国大学法文学部（1943a）『學叢』第1集。
- （1943b）『學叢』第2集。
- （1944）『學叢』第3集。
- 久保勉（1923）「ケーベル博士畧伝」『思想』第23号（「ケーベル先生追悼号」）。
- 『向陵時報』（1943）『向陵時報』1943年11月号（一高同窓会・資料委員会編『向陵時報・寮報』マイクロフィルム版，2004年）。
- コエーベル，ラファエル・フォン（1897）『哲学要領』（下田次郎訳）南江堂。
- 齋藤実（1926）「京城帝国大学始業式に於ける齋藤総督告辞」『文教の朝鮮』第10号（京城帝国大学開学記念号），朝鮮教育会。
- 三枝博音（1972）「日本における哲学的観念論の発達史」『三枝博音著作集』第3巻，中央公論社。
- （1973）「西欧化日本の研究」『三枝博音著作集』第12巻，中央公論社。
- 柴田隆行（1997）『哲学史成立の現場』弘文堂。
- 「思想懇談会関係綴」（1942）（水野直樹先生より提供）。
- 高田里恵子（2022）「安倍能成とは誰だったか？：彼に語らせずに彼を語る」『人間文化研究』第16号，桃山学院大学総合研究所。
- 崔在喆（2006）「安倍能成における〈京城〉」『世界文学比較研究』第17集。
- 朝鮮人事興信録編集部（1935）『朝鮮人事興信録 昭和10年版』。
- 哲学会（1887-）『哲学雑誌』
- 東京大学図書館（1955）『東京大学洋書目録』。
- 東京大学百年史編集委員会編（1985）『東京大学百年史』資料2。
- （1986）『東京大学百年史』部局史1。
- 東京大学史史料研究会編（1993a）『史料叢書 東京大学史 東京大学年報』第1巻，東京大学出版会。
- （1993b）『史料叢書 東京大学史 東京大学年報』第2巻。
- 東京帝国大学（1932）『東京帝国大学五十年史』上。
- 東京帝国大学附属図書館（1938）『東京帝国大学洋書目録』。
- （1939）『東京帝国大学洋書目録』。
- 中根隆行（2008）「在朝鮮という視座と旅の哲学：渡韓日本人の朝鮮像と安倍能成の韓日比較文化論」『日本学』第27号，東國大学校日本学研究所。
- 中見真理（2006）「安倍能成と朝鮮」『清泉女子大学紀要』第54号。
- 西晋一郎（1923）「ケーベル先生の追懐」『思想』第23号（「ケーベル先生追悼号」）。
- 西尾浩二（2012）「明治前期の東京大学外国人哲学教師の資料調査：日本における西洋哲学の初期受容に関する調査・分析のために」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第29号。
- 二宮洋太郎（2023）「安倍能成院長と山」学習院山桜会『山桜通信』第52号。
- 芳賀徹（1994）「戦前昭和の日本人と韓国：安倍能成の場合」在日本韓国文化院編『日韓文化論：日韓文化の同質性と異質性』学生社。

- 長谷川誠也 (1923) 「来朝当時のケーベル先生」『思想』第23号 (「ケーベル先生追悼号」).
- 波多野精一 (1949) 「西洋哲学史要」『波多野精一全集 第1巻』岩波書店.
- (1979) 『基督教の起源』岩波文庫.
- 平山洋 (1989) 『大西祝とその時代』日本図書センター.
- 藤田正勝 (2008) 「日本における哲学史の受容」『哲学の歴史 別巻 哲学と哲学史』中央公論社.
- 船山信一 (1999) 『船山信一著作集 第6巻 明治哲学史研究』こぶし書房.
- 許智香 (2024) 「京城帝国大学『哲学、哲学史』講座の日本人たち：その構成員と制度上の特徴」『立命館大学人文科学研究科紀要』第137号.
- 松井健人 (2020) 「『大正教養主義の起源』東京帝国大学教師ラファエル・フォン・ケーベルと学生たち：大正教養主義創成期の歴史社会的考察」『ソシオロギス』第44号.
- (2021) 「教育制度としての教養教育：旧制第一高等学校長期の安倍能成における教養・教育言説の検討」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第60号.
- (2023) 「戦後日本における安倍能成の教育論：個人の自由と教育をめぐる」『相模女子大学紀要』第86号.
- 三宅雄二郎 (1933) 『岩波講座哲学 明治哲学界の回顧 附記』岩波書店.
- (1946) 『大学今昔譚』我観社.
- 山下重一 (1975) 「フェノロサの東京大学教授時代：社会学・哲学・政治学講義を中心として」『國學院法學』第12巻第4号.
- 渡邊二郎 (2004) 「西洋哲学史観と時代区分」渡邊二郎監修, 哲学史研究会編『西洋哲学史観と時代区分』昭和堂.

・独語

- Deussen, Paul. 1919. *Allgemeine Geschichte der Philosophie: mit besonderer berücksichtigung der religionen*, Leipzig: F. A. Brockhaus.

・中国語

- 梁啓超 (1932) 『飲氷室文集』第5冊, 台灣中華書局印行.

・朝鮮語

- 神谷美穂 (2007), 아베 요시시게의 눈에 비친 조선: 조선전문기『청구잡기』(安倍能成の目に映った朝鮮: 朝鮮見聞記『青丘雜記』), 『世界文学比較研究』第18集, 2007年.
- 金杭 (2011), 해적, 시민 그리고 노예의 자기 인식: 한국전쟁과 전후일본의 사산된 유산 (海賊、市民、そして奴隸の自己認識: 韓国戦争と戦後日本の死産された遺産), 『SAI』第10号, 国際韓国文学文化学会.
- 車承棋 (2011), 경험의 파괴: 아베 요시시게에게 있어서 식민지조선, 패전, 그리고 자유 (経験の破壊: 安倍能成における植民地朝鮮、敗戦、そして自由), 『大東文化研究』第76集, 成均館大学校大東文化研究院.
- 南基正 (2010), 일본 ‘전후지식인’의 조선경험과 아시아인식 (日本の‘戦後知識人’の朝鮮経験とアジア認識), 『国際政治論叢』第50集第4号, 韓国国際政治学会.
- 朴光賢 (2008), ‘조선’이라는 여행지에 머문 서양철학 교수 (‘朝鮮’이라는旅行地にとまった西洋哲学教授), 『比較文学』第46集, 韓国比較文学会.
- 朴致祐 (1936), 아카데미 철학을 나오며: 철학의 현실에 대한 책임분담의 규명 (アカデミ哲学を出て: 現実に対する哲学の責任分担、その究明), 『朝光』1936年1月 (『朴致祐全集 思想と現実』仁荷大學校出版部, 2010).
- 李賢九 (1994), 개항기 유학자와 계몽 운동가들의 서양철학수용 (開港期儒学者と啓蒙運動家の西洋哲学受容), 『哲学思想』4, ソウル大学校哲学思想研究所.